

対話型コミュニケーションにおける意識変化の調査手法に関する考察 2

A study on survey method of changes of interest in the field of Interactive Communication 2

藤平 昌寿^{*1}

Masatoshi FUJIHIRA^{*1}

^{*1} 帝京大学, ^{*2} 放送大学大学院

^{*1}Teikyo University, ^{*2}The School of Graduate Studies, The Open University of Japan

Email: fujipon@riko.teikyo-u.ac.jp

あらまし：前稿では、対話型コミュニケーションにおける内在的思考の変化（参加者それぞれの内面での関心・興味等の変化）の調査手法についての考察を行った。本稿では趣向を変え、哲学対話・哲学カフェなどの哲学的対話を通じたコミュニケーションについて、事例を通して考察してみる。

キーワード：対話、哲学、コミュニケーション支援、協調学習、グループ学習

1. はじめに

対話型コミュニケーションは、複数の参加者が、発話などの表出行動により相互に伝達を行いながら、知見を得たり、新たな発想を創出したりするコミュニケーションである。

その大半は、発話や身振りなどの表出行動により進められる一方、各参加者の内面では様々な気付きや発想、思考などが、コミュニケーション中で常時発生していると考えられ、前稿ではそれを内在的思考と称した。

この内在的思考は、発話等の表出活動が無い限り、他人に伝わることはほぼ無いが、参加者自身にとってはコミュニケーション活動の成果として少なからず寄与していると考えられ、前稿では、これを外在化する手法としての関心変化調査について言及した⁽¹⁾。

本稿ではやや趣向を変え、対話型コミュニケーション一つである哲学対話や哲学カフェといった哲学的アプローチによる対話から導かれる事例を基に、内在的思考の変化を解く糸口を探ってみたい。

2. 哲学対話・哲学カフェ

哲学対話の代表的な例として取り上げられるのが、リップマンによる「子どものための哲学(Philosophy for Children, P4C)」である。学校の教育現場において哲学的な対話を行うことにより、子どもたち一人一人が「自分自身で考える力」を身に着け、全体を探究の共同体へと導こうとする活動である。

哲学カフェは、市民を対象とした哲学的な対話の場であり、ソーテによりフランス・パリで開始されたものである。筆者は、大人や親子などを対象としたカフェへの参加経験がある。

3. 哲学対話による事例

土屋(2013)によると、“リップマンは、子どもの哲学における哲学対話の特徴を、対話の前進可能性に求めている。”と述べており、哲学上の前進を「無知

への気づき」ととらえる「無知モデル」を提唱している⁽²⁾。

一方、本間(2005)は、オスカル・ブレニフィエ氏による哲学アトリエでの事例を取り上げており、発言された内容について執拗なまでに確認作業を行うという事例がある⁽³⁾。これは、たとえ子供であろうと、発話された言葉の真偽を参加者全員の前で明らかにする試みであり、その事実が他に参加者にとってもニュートラルであるという裏付けを取っているともいえる。

森本(2013)は、自身が進行役を務める哲学カフェの中で、カフェ参加者から「話のかみ合わなさ」を訴える感想を基に、「話のかみ合わなさ」をテーマとしたカフェの開催や、高齢者のセーフティーネットとしてのカフェの存在、会話中の沈黙にも意義をあることなどを報告している⁽⁴⁾。

4. 分析

土屋が述べている哲学的前進は、まさに対話の成果を示す一つの指標とも言える。リップマンは、哲学対話が「議論の導くところへついていく」ことによって、コミュニティの中で自律的・自己修正的に進展しているとき、その対話は哲学的に前進していると表現しており、この中には外在的な発言や行動だけでなく、内在的思考をも時に包含しながら、前進していることを示唆していると考えられる。一方で土屋は、ゴールドディングが対話の哲学的前進に関するリップマンの見解をベースに哲学探求の問題解決モデルを提唱しているが、これは哲学上の前進を「われわれの概念や世界のとらえ方の洗練」ととらえる「洗練モデル」であり、子ども哲学の中ではこのモデルでは説明できないものがあると主張している。そのきっかけが「無知への気づき」であり、無知モデルとして提唱している根拠となっている。筆者も親子哲学対話などで、世代間常識のギャップをあらわにされる場面に何度か遭遇しており、それは内在的に無知モデルを実感する場面でもあった。

本間によるブレニフィエ氏の事例は、筆者が触れてきた哲学対話とはおよそかけ離れた印象を持つ事例ではあったが、対話における他者の外在的行動(発言・行動など)が自身の内在的思考に大なり小なり影響を及ぼすとすれば、その外在的行動に対して、極力客観的な意味付けを行うことによるのみ、ニュートラルな対話が継続できるものであり、参加者が発言などを行う際に「よく考える」プロセスを更に要求することから、逆に、場における外在的行動への信頼感や前進が期待できるものとなる。

森本の報告例からは、例えば、話のかみ合わなさをテーマに取り上げることにより、対話への安心感を醸成し、参加意欲を維持することが示唆されている。普段は積極的に活動していない高齢者が哲学カフェの時だけ若い頃と同様に活発に参加する例や沈黙にも意義がある例からも、対話の場への信頼感・安心感につながっていることが読み取れる。

5. 考察

これらの事例から共通する点としては、「中立性」「知的安心感」「よく考える」「無知や他者との違いへの気づき」が挙げられる。

中立性は、その場の参加者全員が年齢や立場などを超えて、1人の人間としての集まりであることを指す。リップマンの提唱する「議論の導くところへついていく」ことや、ブレニフィエ氏の外在的意味付けを繰り返すこと、森本の話のかみ合わなさカフェの実施などは、中立性を担保するための諸作業の一つであろう。

中立性が担保されることにより、(一定のルール内にて)何を言っても良いという知的安心感も同時に醸成されていく。これは、沈黙を認めることや同意圧力などを認めないこと、集団としての結論を求めないこと、他者への否定などを認めないことなどによっても担保されるものである。

知的安心感とは、対話の場の中では何を言っても良いという安心感を醸成するとともに、出てくる言葉などに主観的要素が極力排除されていけば、より「考えて」発言することが求められる。その視座においては、リップマンの原則とブレニフィエ氏の手法とはアプローチが異なるだけで、目標は同じ方向を向いているとも考えられる。

そして、これらの場が設定された上で行われる哲学的対話においては、知っていると思っていたことが実は知らなかった(=違う世界を知った、世界が広がった)ということや、他者と自身との違いを認知する場面が、対話中に何度も起こり得る。筆者も実際にそういう場面が何度もあった。そのほとんどは内在的に起こると考えられる。何故ならば、外在化するためには「よく考える」ことが必要であり、また、集団としての結論を求める必要が無いからでもある。

6. まとめ

前稿で筆者が述べたような対話中の意識変化の調査手法は、哲学対話のような場では比較的導入の可能性が高いのではないかと考えられる。熟考や沈黙が認められ、自問を継続しているコミュニケーションであるからである。

引き続き、対話型コミュニケーション中の思考変化について、考察を進めていきたい。

参考文献

- (1) 藤平昌寿, “対話型コミュニケーションにおける意識変化の調査手法に関する考察”, 教育システム情報学会第43回全国大会論文集, pp169-170, 2018
- (2) 土屋陽介: 子どもの哲学における対話の「哲学的前進」について, 立教大学教育学科研究年報, Vol.56, pp77-90, 2013
- (3) 本間直樹: 対話を演ずる「子どものための哲学」二つの実践, 臨床哲学, Vol.6, pp41-54, 2005
- (4) 森本誠一: 公共的対話としての哲学カフェ. Humanitas, pp35-46, 2013